「子どもたちの笑顔がやりがい」と、とくしま動物園内で上演する田中さん（右）。感情を込めた語りに引き込まれる

オリジナル作ってもっと引きつけたい

人気の紙芝居 動物園の 待ち時間解消

徳島で子らにボランティア活動する田中さん

徳島市の郊外にある「とくしま動物園」の入り口近くにある平屋の休憩スペース。家族連れが、スピーカーから流れる軽快な音楽に誘われて集まる。子どもたちはそわそわ。そこで始まったのは、紙芝居。子どもたちの目が輝く。

動物の赤ちゃんの誕生や行楽の取材で動物園をよく訪れる。紙芝居が人気を集めているのに気づき、どんな人たちがやっているのか気になって、会場に入ってみた。

「たべられたやまんば」を読んでいたのは、市内の病院で調理師をする傍ら、様々なボランティア活動をしている田中浩子さん(58)。「やまんばはとびあがり、おそろしいかおでかけだしました。『まてえ、まてえ』」。ゆっくり話しかける口調に、子どもたちが真剣な表情で聞き入る。

高松市立川添小2年、太田杏奈ちゃん(7)＝写真上＝は「動物だけでなく、紙芝居まで見られて面白かった。もっといろいろ見たいな」と満足そう。

私も紙芝居に挑戦させてもらった。声が通らない。感情移入ができない。緊張で冷や汗が噴き出す。子どもたちはそっぽを向いてしまった。「難しいですね」と話しかけると、田中さんが笑顔を見せた。

田中さんは20年以上前から、視覚障害者のために本を朗読して録音するボランティアをしている。勝ち目はない。「朗読は抑揚を抑えて淡々と読むのが大事。逆に紙芝居は、オーバーなくらいに感情を込めて読まなければ、子どもたちに伝わらない」

なぜ動物園で紙芝居を？

「待ちくたびれた子どもの姿がきっかけなんです」

田中さんは昨年4月、動物園内で、モルモットやヒツジなどの小動物と子どもたちとを触れ合わせるボランティアを始めた。人気コーナーでゴールデンウイーク中、長い行列ができた。せっかく遊びに来たのに、子どもたちは疲れた表情を見せていた。「退屈させてはかわいそう」。田中さんは園にイベント用の紙芝居があるのを思い出し、屋外の行列の前で上演してみた。なごやかなムードになり、動物そっちのけで夢中になる子ども出るほど。以後、休日を中心に上演を続けると、「最後まで見たい」「もっと落ち着いた場所で」との要望が寄せられるようになり、10月から、屋内の休憩スペースで行っている。

6、7人いる仲間の一人、金川艶子さん(51)＝写真下＝は「子どもたちの反応がダイレクトに伝わってくるのが楽しい」と練習に励む。

まもなく1年。「オリジナルの紙芝居を作ってもっと子どもを引きつけたい。動物の魅力に負けないくらいに」と田中さん。今後もさりげなく人のための活動を続ける人たちのことを記事にしたい。

（福島百合子）